fct
GAZETTE

1983.10
vol.3
Number.11

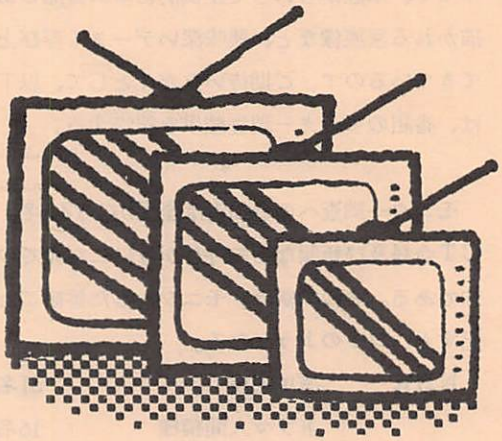
※ガゼットは
“テレビと子ども”
のデータバンクです

発行　子どものテレビの会（ＦＣＴ）神奈川県葉山町長柄１６０１－２７　責任者　鈴木みどり
編集　ＦＣＴ資料室　銀行口座　第一勧業銀行逗子支店（普通預金口座１４２５７８５）
購読料　年間（四回発行）￥1,５００（送料￥２４０）　一部￥４００　郵便振替口座　東京9-84097

■特集

ＦＣＴ第３回テレビ診断モニター調査報告

家族で見ている テレビの中の家族の描き方



いま「家」とか「家族」について言及することはとてもむずかしい。伝統的な価値観が失われて、いわば混乱期にある「家」の問題をどう考えればよいのか。ただでさえ雑多な情報にふりまわされている私たちが、あらたに情報を作り出すことにためらいもないわけではない。

ただ、私たちの生活の中でもはや環境といえるほどに大きな存在であるテレビから日常的に受けとっている家族像に関連したメッセージについてはほとんど顧みられていないのではないか。

父が父として、母が母として、または夫と妻が、父と子が、母と子がどのように描かれているのか、視聴者はそれをどのように見ているのか……このことを究めることは、今の社会状況の中で問われ続けている「家族」の問題と無縁ではないだろう。

以上のような理由から、ＦＣＴの今年のテレビ診断調査は「テレビと家族」をテーマにとりあげることとした。

過去２年間のテレビ診断調査の経験をふまえてあえてむずかしいテーマに挑戦したわけである。

テレビ診断週間は５月23日(月)～29日(日)の１週間とし、この期間の夕方５時から９時、即ち家族がいちばんテレビを見ている時間帯の東京キー７局放映の全ての番組とＣＭをビデオに録画した。

CONTENTS

○特集・ＦＣＴ第３回テレビ診断……1
　モニター調査報告
○家族で見ているテレビの中の家族の描き方…1
○父と息子の古典的型を描く「徳川家康」……5
○新しいようで古い「高校聖夫婦」……6
○三世代家族の「フクちゃん」……7
○ fctフォーラム記録
　テレビ時代の自由ラジオの可能性……8
○特集（つづき）
　「痛快あばれはっちゃく」の父母像……10
○視聴者が日頃感じていること……11
○ＦＣＴデーターバンク・国内篇……12

調査はこのビデオを見ながらのＦＣＴスタッフによる分析調査と、診断週間中に広く一般の視聴者に参加を呼びかけて行うモニター調査の２本立てである。

分析調査についてはＣＭと番組にわけ、それぞれに登場する家族について分析シートに記入。目下、そのデータの集計中で、結果は11月末刊行の分析調査報告書『テレビと家族』にまとめて発表の予定。そこでは、調査期間中に放映されたＣＭ、中でも、本数からいって圧倒的に多い食品ＣＭに描かれる家族像など、興味深いデータも浮び上ってきているので、ご期待いただくとして、以下では、番組のモニター調査結果を報告する。

＊

モニター調査への参加者は全国から148名。ＦＣＴ会員及び新聞などの呼びかけにこたえての参加である。その内訳は、モニターした番組ごとに記すと、以下のようになる。

ＮＨＫ	徳川家康	31名
	ドラマ人間模様	16名
	スプーンおばさん	７名
日本ＴＶ系	太陽にほえろ	４名
ＴＢＳ系	高校聖夫婦	８名
	ちびっこかあちゃん	７名
	３年Ｂ組金八先生	６名
	オサラバ坂に陽が昇る	２名
フジＴＶ系	サザエさん	19名
	世界名作物語	10名
ＴＶ朝日系	フクちゃん	７名
	ドラえもん	５名
	痛快あばれはっちゃく	15名
ＴＶ東京系	まいっちんぐマチコ先生	２名

他に指定時間帯以外の番組「おしん」「東芝日曜劇場」「シリーズ水曜日の女」などを自主的にモニターしたものが９枚あった。

モニター参加者はほとんど全国にわたっている。

北の端北海道網走から新聞で知ったからと電話をかけて参加申込をされた19歳の男子学生、南の端鹿児島市からも女子大生他３名、佐賀県、長野県、新潟県、宮城県と遠方の参加者には男性が多い。首都圏を中心として千葉、埼玉、とくに今回は神奈川県の女性の参加が多かった。

年令的には30代が圧倒的に多い。

30代62名、40代31名、20代25名、10代９名、50代８名。

男性が23名。女性が114名。

職業別では主婦44名、無職22名、学生19名、公務員10名、会社員５名、教員７名など。

以上はいずれもモニター用紙に記載のあったものからの集計である。あえて義務づけなかったためにモニター用紙には無記名、無記載がかなりの数にのぼった。また職業についても主婦とするか無職とするか、このあたりは各自の記載をそのままとることにしたので厳密なわけ方はしていない。

＊

モニター用紙は記述式である。過去２年間のテレビ診断に使用したモニター用紙にさらに改良を加えて、スタッフが何度もブリテストした上で作りあげたＦＣＴオリジナルである。

夕方５時から９時までの間に放映された番組の中からＦＣＴ指定の範囲内で１番組をえらび出して視聴した結果を記入するようになっている。

１度しか放映されない番組をじっくりと見てそのあとで記述しなければならない、しかも非常に要求度の高い設問であるために、「むずかしい」という参加者からの声も少なくなかった。

結果として、返送されてきたモニター用紙の数は多いとはいえなかったが、１枚１枚は、びっしりと書きこまれた密度の濃い内容のものが多くて、読む者が圧倒される思いであった。

以下設問の順にまとめてみたい。

▶問１　この番組に登場する父親、母親の描き方をどう思いますか。子どもや他の大人への態度、言葉、行為などで感じたことを書いて下さい。

▶問２　この番組で描かれる夫婦の関係、または男と女の関係についてあなたはどう思いますか。

▶問３　この番組で描かれる兄弟姉妹の関係、子どもどうしの関係についてあなたが感じたことを書いて下さい。

以上の3問は視聴した番組の中に登場する家族の人間関係についての感想を問うたものである。この項については、分析調査報告書の番組編の中で各々人物像のチェックの結果と照らしあわせてくわしくとりあげることにしたい。

ただ、モニターの記述で特徴的に共通していることは、ある状況設定のもとでの行為、言動についてブラウン管に登場する人物に対する肯定的な感想が圧倒的に多いということである。

「男と女が各々現在ある姿を見詰め直し相互の関わりを改めて考えていくということには大いに同感である」(学生、男、中野区)、「各々一家の中での役割をはたし、助けあっている」(女、37、他は無記載)

家族像だけではなく、父親、母親像についても「微妙なニュアンスの違いを含みながらも、態度や言動に何が善で何が悪かを考えさせるものがある。現代社会の世相を反映している」(学生、女22、仙台市)これはドラマ人間模様に登場する父親の描き方についての感想である。若い妻と再婚したために先妻の娘をまるで他人のようにしか思わない父、に対して述べられたもの。

一方では、ドラえもんに登場する母親について子どもにこまかく口うるさいところが自分もそっくりだと身につまされ、自己反省している30代の母親モニターが3人もあった。

否定したり、批判したりするよりは、その立場におかれた時はと全面的に肯定するか、または自分に照らしあわせて身につまされたり、自己反省をするという対応のしかたが多いということだろう。

サザエさんに理想の家族像を見る

▶問4　この番組の主人公やその家族の暮らしぶり(たとえば服装、言葉づかい、職業、住環境など)について、あなたの意見、感想を書いて下さい。

▶問5　この番組に登場する夫婦、親子、兄弟、姉妹をあなたの家族と比較し、似ているところ、違っているところを登場人物の名前をあげて自由に書いて下さい。

以上2つの問いは、番組の中で描かれている人物像、言動、状況設定などについて、単にブラウン管の中のことと見過してしまうのではなく、自分の周辺とひきくらべることによって、より現実的に考えてもらうことを意図した設問だった。

この問いに対する当然の対応として、徳川家康をはじめとする時代劇をモニターした人たちは、「時代が違うので比較することはむずかしい」と記入している。時代劇はどの局のものでもほとんどが10%を越す視聴率をあげ、おもに中年以上の男性視聴者が多いとされている。こうした状況から考えれば、番組の内容、描き方について、我が身にひきくらべて見るという発想をもたず、エンタティメントとして気楽に見るのも無理からぬことであろう。

常時30%近い高視聴率をあげている徳川家康のモニターの記入については後述としたい。

問4と問5について最も特徴的な記入は、サザエさん及びフクちゃんに見られた。フクちゃんについては後の1頁に詳述があるが、フクちゃんは13.5%。サザエさんは21.3%の高視聴率番組。とくにサザエさんは日曜夕方の6時30分という最も家族で視聴しやすい時間帯に長年にわたって定着している。

こうした条件をふまえた上でサザエさんを選んでモニターした人たちは、「父親不在の我家では三世代同居は美しいかぎりである」(女、31、東大和市)「娘の家族と同居して波風もたてず、なごやかに暮しており理想的だと思う(無職、女、47、青梅市)「マスオが妻の両親と同居というのは理想的であり、しかも娘ムコと両親がうまくいっているのは理想的家族」(女、40、記載なし)「私たちは親子4人核家族なので幅がせまくこまかなことに固執しがち…」(保母、35、練馬区)。同じような記述が30代40代の女性モニターの中にほとんど共通して見られる。

「サザエさんの登場人物は互いに尊敬しあい理解しあっている。ひるがえってわが家ではアル中の父親が完全に孤立し、誰もほとんど口をきかない。アニメのようには現実はうまくいかないものだ」(会社員、男、27、葛飾区)

三世代家族のにぎやかでほほえましい関係に誰もが理想的家族像を見出している。

いわゆるホームドラマ、あかるい家族の言動を描いた「ただいま11人」「寺内貫太郎一家」のようなドラマはゴールデンタイムに放映されなくなってしまった。「積木くずし」をはじめとする問題をかかえた家族を描いたドラマがほとんどというのが現状。そんななかでアニメとはいえ、いわゆるホームドラマのフクちゃんやサザエさんにほのぼのとした家族像を見てほっとなごむ、理想を見出す思いがするのは、かえって健康的な見方といえるのだろうか。

伝統的な役割固定の人間像で描かれるマスオさん、サザエさんの言動、その他の家族の対応にしても、ステレオタイプだからこそ安心して見ていられるという側面があることは否定できない。

ただ、この番組を熱心に見ることで、子どもたちが画面から読みとるであろう固定的な価値観について親の立場から危惧する声が皆無であったことにはいささかのこだわりを覚えた。

サザエさんの明かるい家庭を支持する視聴者にはドラマ人間模様「長い橋」で描かれる家庭に「少し厳しい設定がされすぎている。もう少し主人公に明かるい状況が与えられないものか」（学生、女、20、記載無）と救いを求めているように、あまり暗いドラマには好感をもてないもののようだ。

両親がありながら、それぞれが別の愛人と暮し一人娘に何の愛情も抱かない。非行を働くその娘をめぐって男女２人の保護司が奔走するという筋書きなのだが、現実感をもったドラマ設定であるだけに「親が自分の娘のことを他人事のような感じでしゃべる態度に反感をもち信じられなかった」（学生、女、18鹿児島市）と、かえって現実感への反発を覚えた人もいる。

「２人の起した事件に両親は激怒し、周囲の大人、同級生も好奇の眼を向け、テレビを通して見てる私はと言えばドラマなので……となる」（主婦、43、藤沢市）同級生どうしが愛しあい、女の子が妊娠するという３年Ｂ組金八先生を見た人の感想である。重い現実感のあるドラマに対しては救いを求めたり、ドラマなのだからと大急ぎで目をそらせようとする。ほんわかと楽しいドラマは我が身にひきくらべて理想を見出す、これはごく人間的な反応なのだろうか。

テレビドラマの中でどこまで現実感をもたせるか、表現するかは、ドラマ制作者にとって大きな課題であるだろう。

問６は番組の前後中間に出てきたＣＭについての設問なので、報告書の方に含めたい。

圧倒的に多かった〝自立派〟

▶問７　今「家族」が多様化し、そのあり方が問われています。あなたはどのような家族づくりを目ざしていますか。お考えをお聞かせ下さい。

モニター自身が描く家族像について、思いがけず多かったのは、「互いに協力しあって生きていける様な家族でありたい」（主婦、記載無し、横浜市）「自立する家族」（公務員、女、38、東京都）「それぞれの家族構成員が精神的に独立しており、それでいてお互いに助けあえる家族でありたい」（記載無し、女、40、所沢市）など、自立した人間どうしの友好的なグループとしての家族である。

「何でも語りあえる家族」（学生、女、20、平塚市）「思いやりのある夫婦、親子」（主婦、23、長野県）「信頼しあえる、助けあえる家族」（有職主婦、40、横浜市）といったところが、従来の理想とする家族像で描かれる一般的な答えだった。

前者を自立派、後者を伝統派とでも仮りに分けるとすれば、問７のモニターの記入は圧倒的に自立派が多かった。年代別、性別などによるこの問に関する分析はさまざまな問題提起をしていると思われるので、分析調査報告書の中に稿をあらためて詳述することとし、ここでは傾向を報告するにとどめたい。

次に、番組の中で、各ジャンルを代表して、以下の番組についてモニターの記入要旨をまとめモニターの見た人物像、家族像を探ってみた。また、自由記述の形で求めたテレビに対する一般的な意見、感想（問８）の一部も、続けて紹介する。

（竹内希衣子）

父と息子の古典的型を描く
「徳川家康」

日曜日の夜という放映時間が見やすいのと、毎年新年からはじまって1年続くNHKの看板番組の枠として固定ファンが多い時代劇ドラマである。

男性サラリーマンや実業家たちの間で広く読まれている、そしてファンも多いということは、徳川家康という人物像が現代の男性に感情移入をさそう要素が多いということだろう。この回は武将として、経営者的に描かれる話ではなくて、父親としての悩み、に焦点をあわせた筋立てであった。

家康の父親としての姿に「自分の仕事(戦い)に没頭して家族を省みないところは、現代のモーレツ社員と同じに思えた」(教員、女、27歳、武蔵村山市)と同じ意見を書いた人が多かった。「家長としての責任の大きさ、重さというものを感じた、あんな思いをして権力をもって何が楽しいんだ…」と言い放った14歳の女子中学生(記載なし)、「政略に身をゆだねざるを得ない当時の親子兄弟姉妹の織りなす生きざまも、今の世の肉親の愛憎により作り出される人間模様に共通不変」(会社員、男、40、川口市)、年令に応じて感応する場面に違いはあるものの、肯定的、同情的意見がほとんどだった。

父親像として家康を肯定するのは、主人公としての人物設定上そういう願いがこめられていることにもよるだろう。一方母親像として登場する信康に寄せる築山殿の情、家康に息子の助命を乞う妻としての姿には、否定的な意見が多い。「自分本位の考え方が強い」(無職、女、33、立川市)、「父親不在の母親の姿は時代をこえて変らぬものらしい」(無職、女、39、東大和市)。「自分本位の心せまい……典型的女性像」(主婦、40、藤沢市)、時代劇の登場人物として描かれる女性像はまさにステレオタイプとしか言いようがない。否定的意見が女性モニターから多く出るのも無理からぬことだろう。

時代劇なので、言葉の違い、服装の違い、生活環境、社会状況といったことは現代と比較はできないが、そういう状況の中で人物像だけが現代的に描かれている。「あまりにも歴史的な背景、価値感、社会的地位など違いすぎるので、比較はできません」(無職、女、44、藤沢市)「女の生き方を考える材料としての演出を感じる」(公務員、女、30、東京都)「このわしは戦さの明けくれに御身をここにおきざりにしすぎた。そなたはけしてよい妻であってくれとは言わん。が信康の母じゃ。(中略)戦を口実に妻とむつみあうをさけて、敵の手に利用されたはわしの負けであった……」築山殿を前に述懐する家康の父として夫としての反省は、現代劇におきかえてもまったく不自然ではない。不肖の息子を前にして家庭崩壊を反省する父親像としてはごく典型的な姿である。

こういう家族像に対して、「似ているとか違っているという見方をしていません」(公務員、男、41、川口市)ときっぱり割り切った見方をしている人はむしろ少数派である。「天下統一という平和のために戦争(いくさ)をするという考え方、その前では個人的感情などまったく無力という考え方は恐ろしい気がする」(公務員、男、24、佐賀県)も貴重な見方だと思う。

「築山殿のように「実家意識」から抜け出せない女性が現代でも多い。それが親子関係にも影響しているとみる」(会社員、男、53、記載なし)。信長に敵対する生家武田氏の運命にまきこまれている築山殿をこうした見方でとらえた回答もあった。現代の社会状況の中での家族がかかえている多様な問題が抱えこまれているだけに「家族全員に毎週見せたい心境」(銀行員、男、46、三浦郡)の人もいる。

この番組が高視聴率をとる所以だろう。(竹内)

あらすじ

長子信康を岡崎城に招いた徳川家康は、信長から謀反の疑いをかけられている信康に城を出て謹慎することを申しつける。信長へ身の証しをたてるために我が子に切腹を申しつけねばならない父としての家康の悩みと、身におぼえのないことをわかってほしいと訴える信康。信康の母築山城の息子を何とか助けたいと夫に訴える母親としての情。いっそ逃げてほしいと願う父親としての家康の苦しみが描かれている。

新しいようでいて古い「高校聖夫婦」

このドラマは高校生の夫婦を描いていることもあって、ストーリ全体或いは夫婦像にリアリティーがないとする回答が多い。しかしその割にはかなり好意的に受け取っている。例えば主人公の高校生夫婦について「不潔感がなく純粋で、見ていて気持ちが良い」（学生、女、19才、鹿児島市）とか、「同年代にとって夢であり理想」（学生、女、18才、同）という感想も。又、「未来の夫婦はこのようになるのでは」（主婦、女、39、神奈川県三浦郡）といった意見は、テレビを先取りの予言機械に見立てている為か。

リアリティーのなさはドラマの状況設定にもいえ、女性雑誌に出てくるような洒落た「高級住宅」が登場。外観、内装とも「白」が多用されているのはＣＭ分析結果と同じ。生活の苦労もなく、二人は共同生活の「実験」をしている。このような暮しぶりに対して「暮しが困難だとコメディではなくなり、人間臭くなって暗くなる。楽しさには、ある程度の金がつぎこまれていなければならないのか、と思った」と前出の18才学生。確かに、若い世代には、現実的な描写をクライといやがり、何をするにも金といった風潮はある。

以上述べたような傾向は「少女マンガ」に相通じるところがあり、だからこそ、それらをよく読むであろう同世代の少女たちにアピールしているのではないか。

このドラマの家族と自分の家族とはまるで違う、という回答が多いのも当然と思われるが、ドラマの中のどのカップルも「男が気が弱く人のよい性格で、女の方は神経過敏だが気が強く、いつも夫を尻に敷いているような感じがする。うちの家庭とは全く反対、（中略）ＴＶの夫婦を見ていて、世間はあのようなものか……と考えてしまう」（前出の18学生）のだという。果してドラマは本当に「女性上位」なのだろうか。

内容を分析してみると、肝腎な決定のくだりにくると、それ迄無能力だった夫たちは冷静で理性的な態度に一変、ヒステリックな妻を押さえて自らの判断をくだしている。となると、このドラマは「男性上位」を踏みはずしてはいないことになる。

典子の義母は20代後半だと思われるが、「一度嫁したら三界に家なし」という古風な言葉を知っている。それを引用したモニターもあったが、その語句が若い女性の口から出る不自然さについては述べられていない。中にはこのような義母を「あたり前な態度」（主婦、女、39才、神奈川県）と見る回答も。

富士真奈美演じるしゅんのオバも、マンガ的で使い古された意地悪中年女のイメージ。この２組の夫婦の行動は、ハッキリと性別役割分業化されている。このような指摘はモニターには皆無。

主人公の高校生夫婦は、共同生活のための約束事を作るのだが、これが男女役割を越えたなかなかのもの。「ほんとの夫婦でも、それができれば結構なこと」（男、56才、川崎市）という声もあった。しかしこの約束に対してしゅんはあからさまに反発し、典子もわだかまりを持っているようなのだ。そんな彼らが古い男女観、夫婦観に縛られているからなので、その証拠に、オバ夫婦の前で「本物の夫婦」に化けた彼らは、見事なステレオタイプを演じる。

見かけは漸新なこのドラマ、実はとても古い価値観に支えられていることがわかる。ストーリーや演技もドラマ以前で、「親と子の対立、葛藤が全く描かれていない」（公務員、男、28才、大宮市）というのもうなずける。　（武内恵子）

あらすじ

しゅんと典子は互いの都合で便宜上の結婚をした高校生夫婦。『共同生活』をする上での約束『五箇条の御誓文』を巡って仲たがいしてしまう。それに乗じて二人を離婚させ、家をのっ取ろうとする外国帰りのオバ夫婦。しゅんたちは休戦協定を結び、オバ達の前では仲の良い夫婦を演じる。それを見たオジは、出てゆく決意をする。しゅんと典子は『何かが生れて、大きくふくらんで』と、家についての思いを話し合う。

三世代家族の「フクちゃん」

戦争をはさんで昭和11年から46年まで新聞に連載された横山隆一のマンガ「フクちゃん」は、「サザエさん」とともに多くの日本人に愛された国民的マンガである。テレビアニメ「サザエさん」の高い人気に乗じて、マンガの「フクちゃん」を知らない新しい世代と古くからのファンを狙って制作されたアニメである。

まず、フクちゃんの家族の暮らしぶりについての意見では、「服装は白のエプロン、角帽、下駄ばき。それなりにかわいらしい。画面もゆっくりとやさしく、色もどぎつくなく悪い印象はあまりない」（記載なし）「父親はしがないサラリーマンという描き方や、フクちゃんのかっこう（下駄ばき）と父親のかっこう（背広姿）は時代考証がまるでないようで見ていて腑に落ちない」（無職、女、34、千葉市）「少し古風ではありますがごく普通で、なじみやすいと思います。言葉使いも男女年令の差があり、ていねいと言えると思います。」（無職、女、32、千葉県木更津市）「フクちゃんは木造建ての古い二階屋。なつかしいイメージ。少しもウマクないマンガだが、この回で見る限り、サザエさんよりもずっとホンワカ調で、親しめる。しかし荒熊さんの活躍もなく、オールドファンとしては淋しい。子ども中心の生活マンガである以上、市井の舞台をもっと色濃く出せないか。」（元民放テレビ局勤務、男、56、川崎市）。

VTRを繰り返えし見ると、近代的な幼稚園（明るいレンガ造り、豊富な遊具）フクちゃんの家を除いて現代的な町並み（ブロック塀）フクちゃんの家の広くて美しいキッチンなどが描かれるが、フクちゃんの服装とおじいちゃんの服装はラクダの下着と着物と下駄ばき。この二人が、他とちがったいでたちでどう見ても、チグハグな画面を見せられてしまう。

番組の家族と自分の家族の比較という点では、「私の子どもが結婚し、孫ができ、同居すると仮定して、孫と大勢の友だちをどこかに連れていけるだろうか。潮干刈で流された舟を無事に助けられたからいいものの、おじいさんは罪に問われかねないところであった」（元民放テレビ局勤務）「サラリーマンの夫が、フクちゃんを野球見物に連れていってやる約束をして、よその子まで連れていくところが同じ。上役が来てもてなすことは我家では全くない」（主婦、46、藤沢市）「上役が来て野球見物ができなくなったという場面がありましたが、そういう時は、うちの娘達は恐らく、子どもなりの考えで、上役の前で野球になぜ連れていってもらえなくなったか問うでしょうし、納得できなければ、いつまでも食い下がるでしょう」（無職、女、34、千葉市）

子どもどうしの関係、おじいちゃんの描き方では「隣近所の子どもたちの輪がとても良い。現実の問題としてフクちゃんのようなかわいらしい正義感を持っている子どもが少ない。大人の態度が子どもに影響してくると思う。おじいちゃんがとてもいい」（無職、女、34、三浦郡葉山町）「近所の子どもたちが、ガキ大将がいても皆手をつないで、お互いの特技を生かしながら楽しくやっている」（主婦、35、千葉県市川市）と、モニターのほぼ全員が、やはり、好意的に受けとめている。

祖父母と孫との人間的な交流は、核家族の生活しか知らない子どもに欠けている大切な部分。その楽しさを、たとえテレビででも味わわせてやりたいという親心は誰にでもある。「フクチャン」はそうした親の願いにピッタリの番組、ということのようである。（永田順子）

あらすじ

第一話『はじめての潮干狩り』フクちゃんが初めて海へ行くお話し。幼稚園のお友だちを誘っておじいちゃんに連れていってもらう。途中、子どもだけで、舟に乗り流されてしまう。おじいちゃんに助けられ、お尻を叩かれて叱られる。　第二話『邪魔者は追い出せ』お父さんに野球見物につれていってもらう事になった。が上司と続いて後輩の来訪で行けず、子どもたちで、客を追い出す工夫をする。

テレビ時代の自由ラジオの可能性

報告者／粉川哲夫（批評家、和光大学講師）

自由ラジオの日本での火つけ役であり、又最近『これが自由ラジオだ』（晶文社）を出された粉川哲夫さんに、自由テレビにもつながるパブリック・アクセスとしての自由ラジオについて、実験も交えながら語っていただいた。

自由ラジオとは

70年代に入って、世界的レベルでコミュニケーション環境、メディア環境の変化が起ってきた。そんな中で、電子メディア、特にラジオやテレビを押さえる必要を感じた。そこで出会ったのが自由ラジオ。既成のものより自由な、オータナティブなラジオ局を自由ラジオと呼んでいる。

火の手はイタリアから。1976年、「自由ラジオ法」が制定され、サービス・エリア15Km、リスナー10万人以下の規模なら誰でも自由に電波が出せるようになった。退屈な国営放送に飽きた青年達が、カウンター・カルチャーの影響を受けて海賊放送をやりだし、それが折からの政治変革と結びついて実現したものだ。現在24局を越え、政治的、商業的、宗教的と内容はさまざま。自由ラジオはヨーロッパ全土に波及したが、それぞれの国情に応じ異った展開を見せている。以下、国別状況を見てみると、

イギリス—自由ラジオ法の制定ならず、BBCが自由ラジオ的なものを取り入れて体質改善に成功する。

フランス—70年末に成立かと思われたが、ミッテラン政権樹立後、制限付き20局のみ公認。ドイツと共に今も海賊放送が盛ん。

オーストラリア—70年初頭、移民やカウンター・カルチャーで混乱状態になっていたのを交通整理したのが、地域ごとにステーションを持つコミュニティ・ラジオだった。約2ドルで、誰でも自分の番組が持てる。世界で一番民主的なパブリック・アクセス・チャンネルかもしれない。

アメリカ—大都市、学園都市のパブリック・ブロードキャスティングは、ラジカルな側面を持ちおもしろいが、自由ラジオは存在しない。

日本—カウンター・カルチャーの影響で、ミニコミは盛んになったが、ラジオ迄には至らず。メディア状況がなかなか変化せず、グァムの短波放送やFENがよく聞かれるといった屈接した状態の中から、「ミニFM」が生れた。

日本の「ミニFM」

60〜70年代にかけて、ヒエラルキー社会からネットワーク社会へと地域的規模の社会構造変化が起る。メディアは個々人を増々孤立させてきた。そこで自由ラジオが登場するのだが、これらをしっかりみていかないと、単なるブームに終わる危険がある。

「ミニFM」という呼び方も問題で、これでは普通のFM放送を小さくしたものということになって、その背景を見えなくしてしまう。自由ラジオとは「理念、方向」をあらわすのであって、「手段、形式」をさす「ミニFM」はまずい。電波法4条施行規則6条で認められている微弱電波（100m／15マイクロV以下）を逆利用した形のミニ・ステーションだが、半径500mはカバーできるし、人口密集地では何万人ものリスナーに相当する。日本は技術的には整っているが、アイディアが不足している。

地域と密集

82年以降、続々と出てきた「ミニFM」ステーション。「KIDS」はその代表のように言われているが、マス・メディアが大騒ぎしているだけで、実際はお金をかけたスタジオ遊びに過ぎず、電波はあまり飛んでいないし、リスナーへの配慮もない。ミュージック・テープを作って売るのが目的なのだ。（ここで簡単な装置を使って電波を飛ば

し、「KIDS」とビート・たけしのKIDS批判を聞く。たけし曰く「ガラス張りの中で、手打ちウドンを見せているのと同じ」)

ファッションとは違う、もっと地域に密着したラジオ局もある。自然食等を売るオータナティブ・ショップをやっている主婦2人が始めた「世田谷ママ」。ハガキ、チラシを近所にまいて、リスナー対策にも力を入れている。井戸端会議をやったり、それを聞いた人がしゃべりに来たり、リスナーを放送局に近づける機能を果しているのが、マス・メディアと違う点だし最大の魅力。トフラー「第三の波」のように全て電子メディアですませてしまうというのは、現場に足を運び、身体で体験するライブな面を増々貧しくさせてゆく。メディア病、メディア・エコロジー上の問題も生じてくる。その他のラジオ局としては、

「ラディオ・コメディア豊島」—ミニコミのネットワークに自由ラジオをつなげる。

「ラディオ・コメディア杉並」—ミニコミを持たないので、チラシでリスナーを組織。

以上2局は、共に区議が運営。

「ラディオ・日吉」—自宅で小中学生に英語を教えている人が開局。英語教育を越えた子どもたちのネットワークができる。

「ラジオ木場」—フリー・ライターが運営。地元には地方出身が多い為、流行とは関係ないような音楽を流す。リスナーは20〜30人くらい。

下北沢「ラジオ・ホームラン」—和光大学OBが酒を飲みながら、映画や時事、社会問題をディスカッション。リスナー対策は、事情もあってさびしい状態。

「ラジオ・ホームラン」を除いて全て女性が運営。男性の場合、作り手中心でリスナーが組織されていない。リスナーもちゃんと聞いていて、放送活動にも参加しているのは圧倒的に女性の局。地域の人たちの要求からプログラムを進めることが必要だ。

日本ほど、中央集権的な全国ネットワークができてしまっている国はない。そこから多様なメディアの必要が生れ、自由ラジオがあらわれた。半径500 mはウォーキング・ディスタンスであり、エコロジー的にも良い距離と言われる。そのエリアを人間らしい環境にしてゆくのに、自由ラジオは大きな可能性を持つだろう。あとは、「何を」「誰に」「どういう形で」が問題。

この後、自由ラジオ装置の説明と実験を行う。装置は自作のアンテナも含めて1万円ちょっと。どこの電機屋さんでも買える簡単なもの。フォーラム会場の外にセットした装置を公衆電話とつなげてテレフォン・ピックアップも実験。当日参加していたルーテル・マスメディア研究所のオルソンさんが後藤和彦さん(FCTアドバイザー)に電話。後藤さんのちょっと驚いている感じの声を電波に乗せて会場へ流し、みんなで聞く。

自由テレビの原理は自由ラジオと同じで、装置さえ開発されれば、電波法の改正がない限り、合理的にやれる。しかも、業者の中に乗り気の人も出ているので、今年いっぱいにはめどがつきそうとの希望の持てる情報もうかがえた。 (文責・武内恵子)

子どもの表現力・創造力とテレビ

FCT7月フォーラム・7月9日於市ケ谷

報告者・宮川俊彦・国語作文教育研究所長
高杉イサオ・創造表現研究会会長

宮川氏 — 作文が自己表現の場ではなく、管理されている現状。テレビによって情報を一方的に受けとるクセがついてしまっている現代の子どもたちは、独創的であることが怖い、表現することに怠惰になっている。生きることは表現することだということを子どもに教えたい。

高杉氏 — 創造力というのはけして特別な能力ではない。どのくらい気がつくかという能力だ。今の教育は与えるばかりで気がつくという開発をさせていない。テレビ時代の子どもには否定することではなく適切な処方箋が必要だと思う。今こそ創造教育について考えるべきだ。

「痛快あばれはっちゃく」の父母像

この番組には2組の対象的な親子が登場する。主人公あばれはっちゃくこと長太郎の親子、クラスメートのまゆみの親子である。

まず、長太郎の親子であるが、父親は子どもの意見など聞こうとせずに、子どもにすぐ手を上げるようなタイプであり、権威主義的である。母親はその夫に従い、子どもと夫の間を取り持つような姿で描かれているが、やはり子どもの言葉を聞かずに子どもを怒ってしまう。

この両親に対して、「手は早すぎるが父親らしい父親」(主婦、41、藤沢市)や「子どもに対しても、はっきりした態度をとっている。」(無職、34、木更津市)と肯定的に父親をとらえ、母親に対しても、「現代には少ない主人をたてる母親であり、父と子の仲を取り持つ。」(主婦、41、藤沢市)と、両親共に、肯定的な感想を持つ意見が多かった。

否定的な意見としては、「どちらかというと、単純に物事を言う」(主婦、33、藤沢市)や「子どもの心、親知らずという感じで、子どもの心が読めていない。」(主婦、32、藤沢市)というものであった。しかし、子どもの意見を取り入れず、子どもの良し悪しを自分の基準できめつけ、権威的に叱りつけるという長太郎の父親に対して、拒絶するような意見は見られず、モニターした人たちは、外見的に強い父親を望んでいるように思われる。

一方、まゆみの親子は、母親は子どもに無理だと思った事は、絶対にやらせない。父親も、その過保護が子どものために悪い事であると思いながらも、何も母親に対して言う事ができない気の弱い父親である。

この両親に対し、「父親のやさしさはよく表現されているのだが、母親に対する威厳が足りなさすぎる。父親の力強さがあると良いのだが……。まゆみの母親については、過保護がよく出ていておもしろい。番組をひきたてる役としてはユニークであるが、人間としては問題有り。」(主婦、42、藤沢市)「現代に多い母親のタイプ……過保護」(記載なし)と、問題を感じている。しかし、反対に、「男子(はっちゃく)の無鉄砲さに、今まで我慢していたが、もう我慢できないと、男の子の親に抗議し、子どもを『やさしく守る』姿勢で描かれている」(大学勤務、男、52、神奈川県)と、母親を弁護する意見もみられる。

このように、対象的な親子に対して、賛否両論の意見があるかと思うと、また、「長太郎の両親は親としての本来の姿、まゆみの両親は現在多くみかける一般的な夫婦像」(主婦、41、藤沢市)ととらえている人もいる。果して、そうだろうか。VTRを見ながら分析してみると、長太郎の父親は自分の基準を持ち、それに合わせて、時には独善的に家族をとりしきっているし、また、まゆみの母親はしばしば夫を無視し、子どもを甘やかすだけという、無責任さも浮びあがってくる(詳しくは報告書で)。こうした描き方について、(片方の夫婦は夫のいいなり、もう一方は妻のいいなりで、いずれも、相手方の感情を描くことが少なすぎる」(主婦、35、藤沢市)と、冷静に批判している人もいる。

30分と短かいテレビドラマでは、一般に、主人公や準主人公はていねいに描いても、周辺に登場する人物となると登場回数も少なく、筋の運びからいっても固定的になりやすい。しかし、親子の関係を軸に展開するストーリーでは、親たちの人間的描写を欠いて、主人公の子どもを生き生きと活躍させることは難かしいようである。

(徳本美佐子)

あらすじ

あばれはっちゃくこと長太郎は、元気のよい行動的な小学生である。長太郎は、クラスメートのまゆみが、小さな時の病気以来、過激な運動を避けている事を知る。完全に病気は治っているのだが、まゆみは動こうとはしない。そこで、長太郎はまゆみを鍛えるために、いろいろな事を企てる。ジョギング、スタミナ食…。過保護なまゆみの母親に怒られながらも、最後には、まゆみにも長太郎の気持が通じる。

視聴者が日頃、感じていること

テレビが身近かになればなるほど、テレビについて日頃、感じていること、言いたいことはたくさんある。モニター用紙の最後の設問（問８）では、そうした視聴者の思いを、自由に書いてもらった。返送されてきた調査用紙は、細かい字でびっしりと書き込まれ、鋭い指摘、厳しい注文の目立つ内容となっている。以下に、その一部を抜き書きし、テレビの制作や編成、広告にたずさわる人たちへのフィードバックとしたい。

●今のテレビは小さい子どもに見せたい番組が少ないように思う。ちょうど親の忙がしい時間に30分ぐらい良い番組があったら、すすんで見せるのですが……（主婦、36、横須賀市）

●特に民放については若い人中心の番組があまりに多い。月に一度でも教育番組、手話などの番組を組んでほしい。（主婦、37、神奈川県葉山町）

●人をいじめて困っている様子を笑いの種にするような番組が増えていて、不愉快に感じる。
（教師、女、27、武蔵村山市）

●殺人や人を傷つける場面が多すぎる。人を人と思わないような場面も多い。これはＴＶの心に対する汚染公害で、ＴＶで余暇の大半を使っている現状を考えると、もっと、ほのぼのするようなＴＶの映像は考えられないものか。すべてＴＶが悪いとは思わないが、ＴＶはＴＶの責任を重視して欲しい。（無職、女、33、立川市）

●ホームドラマから辛口ドラマへの移行が云々されるが、それでも、家族の描き方はワンパターンだと思う。もっとドキュメンタリータッチで真実に迫ってほしい。（教員、男、43、仙台市）

●ちやほやされるタレントを数人使って、つまらないゲームをさせたり、つまらないクイズに答えさせる番組が多いが、やっている本人は楽しいかもしれないが、見せられる方は、全く、不愉快です。（女、40才）

●午後３時台の東京地方ウィークデイの民放のひどさには、あきれはてる。公共の電波を使用している局の責任というものを感じないのだろうか。また、見る方も見る方という気がする。子どもを育てる母親を狙っている番組だけに、あえて書かせてもらいました。（女性、47、和光市）

●言葉の美しさが失われている感じがします。家庭生活と余りかけはなれすぎている部分が多い。子どもたちが悪くなっていく一因もあると信じています。（公務員、男、45、北海道沙流郡）

●マンガでも性に関する言葉や行為を描いたものを多く見かけ、安心して見せられない感じがします。愛はすばらしいものですが、男女の愛よりも、人間愛に訴えるものをもつと描いてもらいたい。（和服仕立て、女、36、三鷹市）

●現代人の感覚は麻痺しているのではないだろうか。何年か前までは映像でも音声でも、「ここから先は視聴者の想像力におまかせ」であったが、今は、全てを、これでもか、これでもかと見せつける（セックス・シーン、暴力シーン、ＣＭでも）。次代を担う子どもたちに豊かな感受性を育てることができるのだろうか。世の大人のためにだけテレビはあるのではないこと。不用意に小さな子どもでもスイッチを入れてしまうこともあるのを、よく考えて欲しい。
（主婦、36、藤沢市）

●中身のない、ばかばかしい、どうでもいい番組が多すぎる。そういう番組ばかり見ている大学３年の娘や高２の息子がどうなるのか、先が恐ろしい。日本の将来が心配なくらい。「見るな」と言うと、親の価値観を子どもに押しつけるなと反発する。テレビの害は大きい。ものを考える人間は育たない。（無職、女、48、立川市）

●子どもに悪影響を与える番組が問題になっているようだが、「クサイものにはフタをせよ」という考えより、そういう雑菌の中でいかに子どもを教育するかが、親に問われているのではないだろうか。しかし、いわゆるゴールデンタイムには、ある程度のＴＶ局側の子どもへの配慮が

必要だ。（男、24、佐賀県小城郡三日月町）

●食事時に殺虫剤やトイレ用品のＣＭを流すような無神経さに腹が立つ。低俗なワイドショウを改善すべきだ。いわゆる芸能レポーターをなくせ。他局を真似るのでなく、独自のアイデアで勝負してほしい。（会社員、男、27、葛飾区）

●放映時間を短縮すべきと思う。取材の仕方が個人のプライバシーや人格を無視している場面が多すぎる。ニュースの現場での取材で特に著しい。（公務員、男、41才、川口市）

●夕方の食事の時間、子どもの番組をどの局もなくしてほしい。早朝の子ども番組を中止してほしい。一日中放送しすぎる。（主婦、41、藤沢市）

●コマーシャルを番組の途中に入れるなら、30分ごと位にしてほしい。あまり細切れにされると、かえって、コマーシャルしている会社に反感を持ってしまう。（無職、女、35、神奈川県）

●小学１年の子どもの友だちを見ていると、民間テレビを見ている子とそうでない子は、本を読んだり、お話をきかせてみると、よくわかります。民間テレビ育ちは、10〜20分以上じっとしていられない。番組の途中のＣＭは、子ども向け番組だけでもやめさせて欲しい。

（主婦、33、所沢市）

●あまりに一方的に押しつけられるばかりの映像が多く、そうすまいと思えば、放映中ずっとテレビに向って話し続けざるを得ない。だから、あまり子どもに見せたくないし、自分でも見ません。（無職、女、34、千葉市）

●夫も子どもたちもしっかりした判断力もなしに見ているので不満。三人とも私の意見を全く無視している。確かに、テレビは生活習慣を乱している。ＣＭの思うつぼにはまっている三人を見るにつけても、テレビの今のあり方には腹が立つ。（主婦、46、藤沢市）

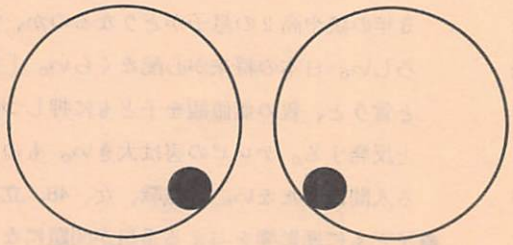
●日常生活の一部になった感があるが、最近は、慣れっこになり、むしろ退屈な、平凡な付き合いになっている。（大学勤務、男、52、神奈川県）

●忙しくて、テレビはニュース以外にほとんど見る時間がない。テレビを見だすと、他のことができなくなるので（新聞、読書、ものを書くなど）、意識的に見ないようにしている。子どもにとっても、テレビを見せて良いこと（プラス面）はあまりないと思うので、今のところ興味ないし、見せないようにしている。

（幼稚園教諭、女、34、所沢市）

●もっと女が番組作りに参加して、女の多様な描き方をしてほしい。（保険外交、女、33、東京都）

●子どものテレビ問題以外に、大人のストレス解消のためのテレビのあり方、その反対に、学習手段としてのテレビ視聴のあり方も、考えていきたい。（会社員、男、53、鹿児島市）



お父さんの目。お母さんの目。
福武書店も、優しく、暖かく、
お子さんを見つめています。

活字が、あたたかい

進研ゼミ，進研模試，学習参考書，教育機器
学術・一般書籍，文芸雑誌「海燕」，児童書
絵本，オックスフォード・カラー英和大辞典

福武書店

本社　岡山　〒700 岡山市高柳東町10－1
東京・大阪・札幌・仙台・名古屋・福岡・
ニューヨーク（ＦＩＰ）
東京支社 〒102 東京都千代田区麹町6-6

FCTデーターバンク

―国内篇―

●放送文化論、津金沢聡広・田宮武編著、ミネルヴァ書房、83年4月。

放送をめぐる文化状況を広義、狭義の両面から再検討し、放送が現代社会でどのような文化的社会的役割を果してきたか、また、今何が問題なのかを整理している。全9章と補論に加え、放送を学ぶ人のための250冊として参考書リストと放送法の全文も付いている。

内容は①ことば文化としてのラジオ、②放送文化のなかの子どもたち、③ジャーナリズムとしてのテレビ、④映像文化としてのテレビ、⑤CMと日常生活、⑥テレビ番組の中の人間像、⑦放送制度をめぐる放送観の問題、⑧国際コミュニケーションと放送文化、⑨ニューメディアと放送文化、補・日本における「放送の公共性」論小史。

章毎に執筆者が異なるため、放送文化へのアプローチ、問題認識でかなりの違いがみられる。加藤春恵子による「放送文化のなかの子どもたち」では、放送文化の日常化にさらされて育ってきた子どもたちが、その人間形成でどのような影響を受けてきたかを、親子関係の変化、教育の変化という二つの要因とからめて考察し、三者はいずれも、子どもの自我を育てる相互作用の機会を減少させるはたらきをしてきたと述べる。また、ながら視聴、切り換え視聴、評論視聴といった子どもや若者に一般的な視聴形態は、彼らのパーソナリティ形成と深くかかわっており、擬似相互作用の結果としての無気力、無関心、無感動、無責任という、いわゆる若者の四無主義をもたらしたように思えると述べている。

6章「テレビ番組の中の人間像」では、主として女性の描き方を問題にしており、FCTの分析研究からのデータも紹介している。

●言語と文化―講座・子ども学3―、藤原喜悦、佐野良五郎監修、佼成出版社、83年5月、1500円。

子どもと言語というテーマの下、乳幼児が母子関係と環境の中でどのようにして言語を獲得していくか、言語発達のつまづきはどうして起るかといった神経生理的立場と言語病理的研究の紹介が第1章。2章以下では子どもの文化と言語の問題を話しことば、ことば遊び、民話、劇画、マンガ、テレビ、読書生活の各方面から掘り下げて論じている。

テレビについては秋山隆志郎が執筆しており、テレビの普及で子どもの読書内容が大きく変化したこと、テレビのことばを真似る幼児が多いこと、また、テレビの内容、中でも暴力の描き方にみられるような望ましくない価値観を学んでいること等を報告している。しかし、テレビからの学習はマイナス面ばかりでなく、NHKテレビ学校放送番組の利用は高い学習効果につながることは実証済みであるとデータを提出。

●東京漂流、藤原新也、情報センター出版局、83年1月、1500円。

話題の本なので、改めて紹介するまでもないが、フリーの写真家・ライターとして13年間アジアを漂泊して日本に帰ってきたという著者の鋭い感性で、80年代の社会現象を論じ、期せずして、文化志向を強める広告への批判、コマーシャリズム機構の巨大さ、恐しさを告発する本となっている。コマーシャリズムが人間の生存に与える影響は政治と同じように大きいと著者は言い、それを例えば、白い壁のダイニングキッチンや北欧風家具と反核署名運動や赤い水玉模様の『日本国憲法』が同居する今日の中流家庭の現出に見、また、深川通り魔殺人等の80年代に入り続出している特異な事件で検証する。

●これが自由ラジオだ、粉川哲夫、晶文社、83年7月。

第2次大戦中にナチ・ドイツに対して連合国側が行ったもの、フランスのレジスタンスが行ったゲリラ放送など、本来は政治的な意図をもって電波を出したのが、自由ラジオのはじまりだとされている。平和な世界になって、イタリアをはじめとするヨーロッパで広く運動として行われるようになった自由ラジオは、新しい市民のメディアとして、より地域的、娯楽的な様相をもつようになった。

日本では最近ミニFM局として愛好者がふえつつあり、マスコミの話題にもなっている。

本書は、日本における自由ラジオ運動の先駆的役割を果たしている著者が、自由ラジオ運動の発祥から実際の電波の出しかたについてなど詳しく書いたものである。

第1章自由ラジオはだれのものか

第2章自由ラジオ局のつくり方

第3章は実際に電波を出して自由ラジオ局として既に実践活動をしている「セタガヤママ」の紹介。

第4章では、解放された新しいメディアとしての自由ラジオの可能性について、コミュニケーションメディアとして機能する真の意味での自由ラジオを待望する願いがこめられている。

●孤立化する子どもたち、深谷昌志、日本放送協会、83年6月。

テレビを代表とする情報化社会は、子どもたちの心理的空間を狭め、社会的孤立化へ追いやっている。成長過程にある子どもたちの置かれている状況、問題点を、小学生、中学生を対象とする調査によって裏づけし分析している。次の各章より成り、多面的見方で今の子どもたちの実態をつかもうとしている。

序・子どもの成長をどうとらえるか、①遊びのスタイルが変質した、②テレビはどう見られているか、③

大衆化社会と子どもの孤立化、④生きる力の衰退をめぐって、⑤成績崇拝と意欲の減退、⑥日本の学校教育に欠けているもの、⑦第二反抗期の喪失と父親のあり方。

●特集・コミュニケーション、「We」83年7月号、P.4～P.27

女性の視点でコミュニケーションの問題を考える特集。立場の違う女性たちがそれぞれの立場から書いている。その中で佐藤洋子（朝日新聞記者）は、マスコミの送り手の側からの問題点として、送り手を形づくる組織に女性が少い為、男の価値観に支配された情報を送り出すことになる点を指摘している。そこを変えるには、組織の中に女性をふやすことと、読者の声の積み重ねであるという。又、鈴木みどりは、受け手側の立場から、「情報化社会で生きる私たちにとって必要な情報とは？」を書いている。不特定多数を対象とするマスメディアは、個人として社会の一員としてのニーズには充分こたえられない。個として自律的に生きていく為には、そのことを知り、そこから得られない情報を把握することが大切。又、それを自分達の手で創り出していかねばならない点を強調している。

●へだたりの時代、福島章、「朝日新聞」、83年8月3日夕刊。

テレビの普及はことばや活字に比較しうるほどの革命的な出来ごとであった、という前提に立って、よく問題にされるテレビ体験とは子どもにとってどういうものなのか、考察をすすめている。

テレビの普及以前に成長した大人にとっては、テレビの映像はあくまで現実のコピーであり、その向こうにある現実に想像力を介して到達する媒体である。しかし新しい世代の子どもたちにとっては、自分の現実体験をもつ前に、大量の「にせ現実」を送りこまれる。そして結果としてどちらが実体なのか、はたして境界線があるのか、混乱したとしても無理からぬことである。極論すれば、ブラウン管の上の世界こそ魅力的で心躍る世界であって、大人が現実だと示すものの方が色あせたコピーにみえることもあるかもしれない。

生の現実から隔てられた成長をした子どもたちは、内面的な幻想や想像力は豊かなのに、自分を現実に関与させる意欲や自信を持ちあわせない、直面させられると混乱に陥ってしまう。テレビの普及は、大人の世代とはまったく違うこころの構造をもった新しい人間をつくり出しているのではないかと、きわめて意味深長な提言をしている。

●特集・テレビが面白くないから、テレビの面白い見かた、「クロワッサン」、83年9•10月号。

最近テレビが面白くなくなってきたが、見方の工夫をすることで面白くしてみようという特集。プロデューサー、漫画家、タレントなど多勢の人達のテレビの見方あれこれを集めている。ビデオを使って楽しんでいる人の紹介、小さなコラムによるテレビ情報などもある。その中で、谷川俊太郎と寺山修司のビデオを使っての往復書簡は、相手に何かま伝えたいときビデオがいかに豊富に語ることができるかを示している。

●特集・テレビ—笑っていいかな？「朝日ジャーナル」、83. 7. 29号。

「テレビおもしろ番組研究」編集部によるテレビ映像に対する考え方の変遷と、対談—横沢彪（笑っていいとも！、オレたちひょうきん族、のプロデューサー）と嵐山光三郎（評論家）、「いまインテリほど笑うのでR」から成る特集。テレビ映像については、草創期には、映画や演劇、新聞から入って来た人がほとんどだったので、その発想が映像に持ちこまれた。しかし現在では、学校を出てすぐテレビ界に入って来た人たちが、テレビ的発想で製作するようになってきた。その事が、テレビ映像を「不朽の作品」からナンセンスの時代へと変えていったのではないかと指摘。

又、対談で横沢は、「笑いを通してみると視聴者、特に若い人のレベルは高く、センスも良い。本物とニセ物を見分けるフィーリングをもち番組の見方も知っている。製作者の側としてはそういう視聴者にどこまで追いついていけるかという戦いがある」と言っている。

●自衛隊の婦人〝広報〟作戦、森山恵子、「マスコミ市民」№183（83. 9）。

今年は婦人自衛官が生まれて15年目になる。この間、マスメディアを使った自衛隊の広報施策はどう変化してきたかを広告コピーと広告予算の変遷をたどりながら検証する。

防衛庁の広報予算は73年に急増して以来6億円前後を維持してきており、全国紙、地方紙、雑誌、中でも「女性自身」等の婦人雑誌、テレビといったマスメディアによる青少年や婦人層を狙った積極的な作戦が展開されてきた。

●特集・生活の中のテレビ、「国民生活」82年7月号、PP4～30。

日本でテレビ放送が始ってから30年、テレビの変遷と影響力について特集。①テレビの功罪—戦後の研究史を踏まえて—稲葉三千男（東大教授）、②テレビと子ども—受身から能動的選択へ—北川隆吉（名大教授）、③テレビのしくみを考える—送り手のモノづくりの〝からくり〟志賀信夫（放送評論家）。

その中で、稲葉三千男は、マスコミの影響力がどのように考えられてきたかを、1940年代は過大評価し、1960年以後は過小評価していた、今はほどほどの評価をしようというところにある。又、テレビの影響は、ある特定の番組、CMだけをとり出して論ずるだけでなく、テレビという

コミュニケーションの全体を見渡して論じる態度、社会全体の構造の変化の中に位置づける態度が大切だとしている。

また、同誌「発言」欄で、ひょっこりひょうたん島の再登場をの呼びかけがある（井上豊）。

今の子どもたちに夢と希望を与え、健全なテレビ番組を産みだすきっかけになることを願って、かっての名作の再放送を実現しようというもの。

●子ども向けテレビCMの諸問題、無藤隆、「キャパシティ」、83年6月号。

子ども向けテレビCMをめぐる諸問題について、アメリカでの研究を中心に論じている。CMと番組の区別については、5才位でほぼできるようになり、子ども向けCMであれば、その中心的情報の把握もできる。がその一方、中学生になっても、一般的レベルでは広告に批判的でも、個々のCMの評価はあまり正確でなく、CMのもっともらしい言葉を信じる傾向が見られる。更にCMと親子関係について中学、高校生について調べた研究では、家庭の中の家族のコミュニケーションのあり方の違いによって、テレビCMと消費に関する知識とか、「物質主義的態度」とかの関連が異なることがわかったという。消費に関する望ましい教育は、子どもの独立した思考を強調する親の下で伸ばされ、そこでは、新聞が重要な情報源となるようである。

最後にCMは、基本的には商品情報の伝達にあるという認識を基礎におくべきではなかろうかと述べている。子どもは商品についての知識が少なく、情報源をテレビCMに求める率も高い。このような子どもの特性を心得た上で、商品の重要な特徴をわかりやすく伝える工夫が望まれると提言している。

●ことばの面からみた幼児とテレビ(1)、(2)、管原謙・阿部喜充、「放送研究と調査」、NHK総合放送文化研究所、1983年7月号、9月号。

母親が幼児に見せたい番組（7月号）、見せたくない番組（9月号）を質問紙法による調査からまとめている。記入者は関西、関東両地区の幼稚園に通う幼児計1,617人の母親で本年2～3月に調査を実施。

それによると、母親が見せたい番組のトップは両地区いずれも「まんが日本昔ばなし」で親子の語らいに役立つというのが理由。同じ理由で「サザエさん」、「わたしのアンネット」「おかあさんといっしょ」等の番組も上位にあがった。2位は「野生の王国」（関東では3位）と「ひらけポンキッキ」（関西で3位）。自然の情景を見せたい、楽しみながら勉強できるが各々理由。

見せたくない番組の1位は「8時だよ！全員集合」。次いで「オレたちひょうきん族」、「うる星やつら」、「まいちんぐマチコ先生」と続くが、いずれも、子どもが普段よく見ている番組である。見せたくない理由でもっとも多いのが、ことばづかいが悪くなるというもの。それ故か、幼児の年令が高くなるほど、母親が見せたくない番組の数は増加する。

●特集・テレビの上手な見せ方、つきあい方、「プチタンファン」№12、83年8月号。

人気の幼児番組制作者5人に聞く「こんなふうに作っています」と、FCTの鈴木みどり、無藤隆の両氏が読者の質問に答えるという形で、幼児のテレビ問題への対応を考える特集。

●子どもにとって必要な情報はなにか、竹内希衣子、「育てる」83年7月号。

テレビのもつ速報性、同時性という秀れた特質よりも、むしろ娯楽的な要素の強い番組を好んで見る子どもたちにとって、テレビから得られる情報とはどういうものか。成長期

放送の裏側の真実を語る雑誌

放送レポート 65号

発売中！ 定価350円

●マスコミが語らない——●
もうひとつの読売巨人軍

座覆談会面
テレビ時代劇はいま
若者達の冷い視線に立往生するワンパターンの内側

老人にとって時代劇とは何か

紋切り型放送表現の研究①
嘆きの歳時記ニュース

カメラ取材力が勝負をきめる
クイズ番組〝新〟時代

拡大する放送禁句第5弾
国連の提言から日本の惨状まで

テレビドラマ
『黒い雨』 脚本 高橋玄洋

「笑い」の定義師 コントレオナルド

連載◆スポーツアナウンサー一代／岡田 実
一日遅れの日本シリーズ放送

●海外からのレポート●〈イギリス〉
CATVの放送におよぼす影響

発売元・晩聲社 ☎03(255)0030
東京都千代田区神田駿河台3-2山崎ビル
発行・放送レポート編集委員会

の子どもにとって最も必要な情報とはどういうものか、を考察する。

同時掲載「ニューメディア時代の家庭教育」柳下真一、「五感から受けとる情報のぬくもり」青木恵美子、「フランスのテレビと子ども」木場恵子、「我家のテレビさん」荒井佳代。

●隔週刊男性娯楽雑誌の「利用と満足」研究、新井直樹、東海大学生、1982年。

20才前後の男性を読者層とする隔週刊雑誌「GORO」と「スコラ」の内容をグラビア、ファッション、スポーツ、セックス、車・オートバイ、音楽情報、その他に分類し、各々の内容を読者がどう読み（利用）、そこから何を得ているか（充足＝満足）を調査した。有効回答数は男子大学生52人。その結果をみると、利用度ではセックス、音楽情報、グラビアで高く、特に前二者を全く読まない人はいない。充足という点では、友人とのコミュニケーション手段に利用する、実用性に欠けるが見て読んで楽しむという効用がもっとも大きい。つまり、読者はこの両誌からのファッション情報を生活にとり入れようとする意識は持たず、むしろ、「見て」楽しむ気軽なメディアとして受けとめているという。

●老人がテレビに求めるものは、香取淳子、「放送レポート」№64（83.9）

地域の老人大学等へ通う老人358人にテレビからどのような満足（充足）を得ているかを調査した。老人を学習活動タイプ、趣味活動タイプ、無活動タイプの3群に分類し、各々のタイプの老人にとって、テレビとは何かを追求している。無活動タイプの老人はテレビへの依存度がもっとも高いのに、充足内容は貧弱で退屈をまぎらすだけ。これと反対に学習活動タイプの老人は短かい視聴時間を有効に使い、世の中の情報を得たり、各種の感情を追体験している。

●特集・変わる視聴率の読み方、「月刊民放」1983年5月号、P.6～26。

①移りゆくマス重視の社会観、波田野静治（ビデオリサーチ社長）、②視聴の実態をどこまで摑むか、貝塚康宣（東京放送調査部）、③質的データが生む価値の拡充、篠原俊行（民放連企画部）、④座談会・編成・制作からみた視聴率、竹内郁郎東大教授と各局編成局長。

視聴率が最近、高くなっているのはスポーツと報道番組、反対に低いのがホームドラマ。この現象を波田野は〝ほんもの志向〟と捉え、NHK教育TVの視聴率上昇を〝多様化細分化現象〟という。

量から質の時代に入ったテレビで視聴者の実像をつかむにはどうするか。貝塚は視聴率に加えて番組好意度調査の継続を勧める。また民放連では竹内郁郎他の協力を得て充足度調査システムを開発。その活用事例を篠原が紹介している。

全体に送り手の中の良心派の発言といった感じ。視聴者を捉えようとこれだけ真剣な努力が払われているのに、視聴者側の実感は「通じない」という空しさ。システムの変革が必要ということのようである。

●人生読本「テレビ」河出書房新社、83年5月。

この数年間にテレビについて書かれた論文、エッセイ、著作物からの一節を集めたもの。沢木耕太郎「視ることの魔」、桐島洋子の小松錬平に宛てた手紙「テレビに向き直る時」があるかと思えば、吉田直哉と堂本暁子、番組制作者による対談やマスメディア研究者による論文も。

全体として視聴者の発言は少なく、「放送広告の日・私とテレビ」に寄せられた手記数篇を収録するのみ。

（文責・鈴木みどり）

おことわり

データバンク海外篇は次号にまとめて紹介します。ご了承下さい

子どものテレビこれでよいのか●悩む母親へのガイド
E・ケイ著 奥田暁子・鈴木みどり訳 B6判 一二〇〇円
子どもの歓心をかうため、ますますエスカレートするテレビ番組とCM。子ども向テレビ番組をよりよくするための実践に基づいて作られた母親向ガイドとして注目の書。放送事業と番組制作のしくみ、テレビの害を防ぐには、CMの問題点と反応、市民運動の可能性とガイドなど、アメリカでの実践から生まれた実際的な本。「子ども向けの良質テレビ番組を実現するための格好のガイド・ブック」（朝日新聞）「日本の母親が見習うべき点が多い」（日本経済新聞）と好評。

子どものテレビを侵すもの
W・メロディ著 高桑康夫・鈴木みどり訳 B6上製 一六〇〇円
既刊『子どものテレビこれでよいのか』は、アメリカの「子どもにより良いテレビを！行動する市民の会」の実践行動から生まれた本だが、本書はそれに触発され、商業放送における子どものテレビの持つ経済的仕組みの特殊性と、その財政を動かす力学と動向、公的機関が採り得る政策などを研究した書。前記の書を実践的ガイドとすれば、本書はその理論篇とも言える。

テレビと障害をもつ子どもたち
ハーモナイ他編 FCT訳 B6判 二八〇〇円
本書も米国のACTの研究と活動から生まれたもので一般社会における障害者のみならず、人種的偏見も含めて多くの差別、無視、無関心があること、そして特にそれがテレビに顕著であることを指摘している。こうした差別と偏見の対象となっている子どもたちを、どうテレビに関して復権させるかを、具体的に番組作りや、マスコミ活動の例を通して示唆する。この問題については日本より数歩進んでいる米国の専門家、マスコミ従事者、障害児の母親などが協力しあいつつ、全9章25項を分担執筆しており、その熱意と行動力は読む者に強く迫ってくる。日本にも生まれた「子どものテレビの会」のメンバーが翻訳を分担した。

東京都新宿区市谷砂土原町一―一 聖文舎